

『信用統制と景氣變動』

——高島教授の新著を語る——

南 亮 三 郎

—

その高雅莊重なる巨冊の一部が、私の机上に置かれたのは、出版されてから間もない十一月の初めだつた。丹精こめて仕上げた自分の著作に對すると同じやうな氣持で、そして同じやうな仕方で、それを手にとつてみたり下に置いてみたりして、切れ味のよい紙幅の裁斷に一種の快感をさへ覚えながら、インクのアともまだ鮮かなページを繰つたものである。が私は、實をいふとその時、『さて』と心構へしてこの書にむかふの勇氣を著しくそがれた。本文八百二十八頁といふ重壓龍大

な分量が第一に私を畏嚇してしまつたのである。

二月月のち私はやうやく身邊の雜事からのがれ、ゆとりある心持をもつて、改めて本書を繙くの機會をえた。おほよそ三日間、私はできるだけ雜念を斥け、章を逐ひ節に従うて、著者とともに想念し、思考し、さうして省察を加へて行つた。私は今、一行の辭句も抜かさずに全卷を讀みとほしたこの巨冊をもう一度机上にうち眺め、裨益され啓發された數多の章節をかへりみて、今更ながら著者のもつ大いなる力に、最上級の敬意と強い仰觀の念とを捧ぐるを禁じえない。私自からは、この種の學問領域においては殆んど無智にも等しい身であるにかゝはらず、あへて筆をとり讀後の感を綴らうと思ふに至つたのも、いはゞこの、著者のもつ大いなる力が私を動かしたに外ならぬのである。

謂ふところの大いなる力とは何か。堂々四十四萬言、論じさり論じきたるところ、實に一個の疑點、晦澁のあとをさへとどめざる理論の強さはそれである。が、そればかりではない。それと同時に、或はそれ以上に、著者のもつ異常なる統綜の力と、現實の事象への素直なるしかし鋭い直觀の力とが、この大伽藍の二大支柱となつてゐる。だから人は、この著作を通じて、その中に織りこまれ展開され、批判され吟味されたところの、金融論上の——しかも、金融論、貨幣論、景氣論、更

に進みては經濟學一般についての、あらゆる主著作、主思想の正當なるあり家を發見するであらうし、他方また、動いてやまない現實の複雑多岐なる經濟事象への正しい認識に『東道』されるであらう。しかしてこの、縦横無盡に使驅され展示された強い直觀の力こそは、著者をして『その初めから全一的に構想された體系的著作にすらも勝りて、一段の熱意・愛着を保持』せしむる所以であり、同時に本書の評價をして一そう高からしむる特異性でもある。

人の知るやうに高島教授は、その經濟科學的處女作たる『金融の原理』(一九一五年刊)以來、世のうつり風潮のかはりゆくにも拘らず、敢然と立つてその独自の論壇を固守し、あひ次いでの大少幾多の勞作をもつて常に時論と政策への、忠實なる開題者となり批判者となり、提案者となり指導者となり來たつた人である。それはまことに稀有の事にぞくする。何故か。教授ほどの博大な讀書力を持ち、多方面への天分的な趣味性を有する人が、おそらくは手をひろげてその胸に迫りきたるであらう一切の誘惑的關心を斷乎としてしりぞけながら、つねに自からを、その興へられた領域にのみ深く沈潜せしめ、かつて一個の餘念をすらいだくに至らなかつたやうなことは、學界に多くその例を見ないからである。と云へば私は、教授の關心事の狭さをでも語るものと解されるであらうか。さうではない。私の云ひたいことは反對に、教授においては一切の經濟科學的關心事が、その

主たる認識要求圏内に統綜され、日々新たに發現する社會的、經濟的諸事象の推移發展の相が、くまなくこの觀點において照覽され、論述されてゐる、といふ一事につながる。教授の著作——わけでも新著『信用統制と景氣變動』(昭和五年十一月東京同文館刊、價四・八〇)は、それゆゑに、教授にとつては單に金融論上の一論策ではない。それはまさしく、あらゆる興味と精力とを集注し傾倒しつくしたところの、巨大なる一個の動態經濟學體系である。

二

以上私は、あまりにも多く本書の紹介と直接には關係なき事項を語つたであらうか。私はしかしさうは信じない。本書に對する全體的な理解の上に、及び本書を通じての著者の根本的な態度の確定の上に、それは必要不可欠の證言であつた。純粹の金融論的著作としては、一見不似合とさへ思はるゝであらう本書下編『經濟學に關する斷章』(それは優に本書の三分の一を占めてゐる!)もまた、かやうなる著者の立場への一般的理解において初めて、その正當なる存在理由が認められるであらう。

私は今本書に對する全體的な理解といつたことであるが、それにつけてもう一つ、補足的に云ひ

添へておきたいことがあるやうに思ふ。何か。著者はつねに自己の領域を固持しながらも、不斷に生成變化してやまない動態經濟的諸問題の渦中にその全身を投げこみ、世の問題を直ちに自己の問題として、勇敢にその思索内容を變ぜしめつゝあるの一事、——著者の言葉を借りて、より具體的に云ひ表はさうなら、『世界的經濟生活における客觀的情勢の發展線が、その長き變態から常態へと轉換せられ、偏へに調整化・安定化・合理化に向うて通貫的に進行したのに伴うて、著者みづからの思索が亦た通貫的に突き進められてゐた』（序文二頁）一事がそれである。これ、論壇に向うて著者の投げかける問題が常に新しく、その思索が生々進歩してやまない所以である。

この事は、特に本書について強調されねばならない。『前論文集「動態經濟の研究」の刊行（昭和二年七月）の前後より昭和五年春にかけての約三箇年に互り、世界の、隨うて本邦の經濟生活の進路は、』と著者はいふてゐる、『大體、右の國際的な發展線を進み來つたのであるが、流通經濟生活の事象が凡そ世界とともに進退すべき筈の必然性に信ずるの吾人は、其の間、わが政府の政綱又はその經濟政策の變更され又た左顧右眄され來つたことには全く超越して、偏へに我が經濟生活の存在と歸趨とを正視し、ひたすら系統的に、正しき理論と正しき政策との指さす一筋道を實證し續けた。』（序文二、三頁、傍點はみなみ）確信に満ちたこの、不動にして而も進歩的な態度こそは、總

じて三編廿一章を包む巨作の奥底を横流し、その上に樹てられた一切の論議をして躍動せしむるの底力である。

さてしからは、本書は何を主題とし、何を究明せんとしたものであらうか。乞ふ、先づその系統だつた豊饒な編別に一瞥を投ぜられよ。

三

『新金本位と信用統制』と題する上編は、首章『名目主義貨幣理論の發展と新金本位制への解釋力』以下八章を含み、中編『景氣變動とその安定』は、『貨幣的景氣理論並びに汎歐貨幣制度論への考察』、『景氣變動理論の梗概と信用統制策の管見』以下五章を、しかして下編『經濟學に關する斷章』は、『綜合』としての福田經濟學原理』、『大西經濟學とその發展とに就いて』以下八章を總べてゐる。

本書の主要部は云ふまでもなく上・中兩編にあつて、ここに含まれたる名目十三章は『概ね統合されて』、著者の多角的にして而も尖鋭な洞察の、はなばなしい『展覽場を形成する』。著者は先づ上編において、最近時における貨幣理論の多様な發展相をあとづけ『動態的理論化された名目主

義理論』を高揚し、英米を中心としての新金本位制施行下における貨幣価値の安定と關聯せしめてその適正な解釋力を究明し（第一章）、進みて貨幣価値の決定と安定との理論を宣明する一方（第四・五章）、新金本位運用を樞軸としての中央銀行の信用統制を詳論し（第二・三・六章）、最後に金解禁論をめぐつての日本經濟生活の向ふべかりし歸趨を克明に標示してゐる（第八章）。

中編の主題『景氣變動とその安定』は、おそらく上編にもまして深く人の心を捉へるであらう。何故か。この編の諸章こそ、現時における日本の最大關心事の一たる景氣論上の根本問題——景氣變動は如何なる原因によるか、貨幣・信用統制の金融政策は如何なる程度にこの景氣變動を支配しうるか、を綿密に取扱つてゐるからに外ならない。景氣現象の闡明に關する著者の立場は、すでに前著『動態經濟の研究』においてその片鱗が示されてあり、シュビートホッフ、カッセル等を宗として財貨側強調の景氣理論を提唱したことは人の記憶になほ新たなところであらう。が、これをもつてなほ『餘りにも斷片的な憾みを有つて』をり、『この學田における私の思索は、體系化され再吟味されるの必然の下にあ』つたと解する著者は、今や進みて、その一つの對極にあるものとも考へらるゝホートレー一派の貨幣側強調の景氣理論およびビグーとの論争を主題にとり、これに『多少の傾倒』をすら示しながら、時には正面から、時には背後から、しかして時には側面から迫りき

たつて、異常の周到さをもつて吟味に吟味を重ねてゐる。わけでも第二章『景氣變動理論の梗概と信用統制策の管見』(三五九—四三〇頁)、及び第三章『純粹貨幣現象的景氣循環理論とその吟味』(四三二—五〇七頁)は必讀の文字であらう。

以上はほんの、しかも甚だ不完全なる、本書主要部一班の紹介にすぎない。このほかに記すべくして記さざりし論策もある。たとへば上編第七章の『過大國債の歸結としての資本課税案又は代案の復活の意味』(二〇七—二五六頁)、中編第五章の『生産統制と産兒統制への管見』(五三九—五六六頁)がそれであつて、前者は直接の題材をイギリスにとつて租税體系の社會化と失業保險の擴充とを高唱し、『偏へに、よき民生と、善き政治の前提たる、より善き財政とへの、一指標を考へよう』したものであり(二五一頁)、後者は『一方、わが産業の企業經營上の基調にも今や英・米・獨國流の統制が、ひしひしと差し加へられつゝあるのに、他方、これに對應する人口新供給の仕事のみは、舊態依然として無目的・無意識・無計慮のままに、何らの統制なく放置されてゐる』(五〇—一頁、傍點は原著者)の根本事實に肉迫したものである。

下編『經濟學に關する斷章』に含まれてゐる八章もまた、いづれも捨てがたい名曲である。著者はこれらを指して『一般經濟學上の優れた最近の諸文献・諸思想を、動態的視角から迫り批判する

によりて、間接に拙見解を表白すべく意圖したもの』と云ふてゐるが（序文七頁）、私が一讀して、いな或る章の如きは再讀までして得た感じは、著者の謙讓なる表明以上のものであつた。本書の主要部に散見されるところの、——そしておそらくは教授にとつて、『一旦これを得た後はその研究の指南車』となつたでもあらうところの、根本的立脚地が何處におけるよりもより端的に表現されてゐるからである。謂ふところの根本的立脚地とは、『金融・産業上、凡ゆる國際的協調協働を營むによりて、一國大衆の厚生化が亦た保障されると云ふの見地』（序文六頁）、或ひは『其れより導かれての經濟生活の漸次的なる社會化並びに統制化てふ政策』（同八頁）がそれである。これやがて教授が、その門下逸材多きに拘らず未だかつて言葉の嚴密なる意味における *Nachfolger* を有せざりし福田博士に、滿腔の敬慕を禁ずるをえずして徐々にその立場への接近を表明し（六一五頁）、進みては第三章に『神田乃武先生の勞作と國際平和への新展望』といふ、いとも熱意にみてる追想録のあつた所以である。

四

讀みをはつて卷を閉づれば、總じてはいまだ漠然たる印象の中からも、心胸に迫りきたる感興は

極めて大きい。貨幣理論の動態化的研究から進んで信用統制の近代的技術を論述した上編の諸章はたとひ私の味解を超えるにしても、したがひて學的興味を主として中編諸章の景氣理論(それはたしかに本書の重點である!)に集注するにしても、それらが私の心をゆり動かすの力は大きい。

人あつてもし、約せられたる景氣理論の『體系化』に求めてなほ充たされざる或る種の不満をもちらすとしたら、私はあへてかう云ひ進みたい、それは本書の不備ではなくて、却つて重視せらるべき特徴であると。なぜならば本書は、單に筋書を逐うて平坦な一路を走る概説書ではなく、あらゆる主問題、あらゆる活資料を内にとりながら、包括的、多角的な見地に立つて、分析し綜合し、批判し攝取した著者の思索過程そのまゝの無飾大膽なる發表であるから。だから高度の心の緊張をもつて(私は云ふ、この著者の論策に向うては一般に餘ほどの緊張味を持せざればその終局の論旨を掴みえない!)この書を読みをへた人は、著者みづから或る場所で美しくも表現した讀後の快感——『宛がら、一見、論争の崎嶇たる、然かも實際には一岐路の存在を許さざる、螺旋狀的山路を平安に案内せられて最高峰頂に立ちいで、後ろに踏み破れる綠なす連巒の全景を、秋晴れに展望するごときの、快感』(五七六頁)——に陶醉することであらう。

ただ一つ、著者の高唱する貨幣・信用統制の金融政策が景氣變動に對して如何なる程度の効果的

影響を與へうるか、また、著者がひとへに目指す物價安定——『全景氣安定』に對して幾許の寄與をなしうるか、更に進みては金融政策そのものが全經濟政策中いかなる地位を占めるかは、そのいはゆる『厚生經濟學的』立脚地の、より深い根基付け、體系化と共に、むしろ著者の近い將來により多くの展望が期せられるのではなからうか。過去三ヶ年の現實世界が著者の『考へを一貫原理に纏めしめる資料を成熟させ提供し』たと同じやうに、今後の世界の動きは著者の理論の眞理性を事實において檢證し、寸時も停止しない著者の思索をこの方面へと誘ふて行くのではなからうか。

それはしかし、ほとんど門外漢にも等しい私一個のえて勝手な望蜀にすぎなかつた。本書はすでに、その主題とするところを寸分のすさまじく見せず論じつくしてゐる。それは著者にとつての、過去二十ヶ年の長きにわたる金融論的思索の最大の所産であり、それ自身完了した一個の『體系なき體系』——より適切にリッケルトの用語をかりて云はうなら、『開かれたる體系』das offene System——である。内に完了した幾多の問題を包藏し、同時に將來への無限の進展を約束してゐる。著者は私への書信において『同書が今の小生としては力の極限の傾けられた』一事を述懐した。出版まもなく本書が初版をつくして、すでに再版が市に送られたと傳へられるのも故なしとしない。學究者および實際家の双方に愛鑑されるであらうことを、私は信じて疑はない。

著者の文章が素晴らしい學術美文であることは、すでに久しい世の定評である。その冴えは一段と本書において展示されてゐる。音吐朗朗、金鈴の響きすらが、行間から流れ出づるのが聞かれるではないか。その措辭また綾を織るごとくして一句の不用意なる染出もなく、新造語、新辭句は浮彫の如く全卷に刻み出されてゐる。それは正に、彫琢に彫琢を重ねられた名匠の巨作を想はせるに充分である。世にもし物好きな人間があつて誤植を發見するを快事とするにしても、この書においては彼れは必ずや失望するに違ひない。わづかに一個の誤植をすらこの書に見出すは困難であるから。

五

興の赴くまゝ、思はずも餘事にわたつた。筆を擱かう。教授の自惜、自愛を祈りながら、そして私の外遊中いつも長文の書を寄せて、時には慰撫し、時には激勵してくれられたその變らざる厚い情誼に感謝しながら。